サクラエビ異変

専門家「調査項目拡大を」

富士川流域 分析結果発表

静岡大教授ら 継続訴え

サクラエビの不漁を受け、由比港漁協（静岡市清水区由比今宿）は1日、富士川流域の同区蒲原の工場放水路付近の海底などから採取した泥の分析調査結果について、有機物による汚染は確認されなかったと発表した。しかし、静岡大のカサレト・ベアトリス・エステラ教授（海洋生物学）から専門家は肝心の不漁の原因を探るには「調査項目をさらに広げる必要がある」と不十分さを指摘。よりサクラエビの生態に即した項目や手法を加えて調査すべきと強調した。

＝関連記事30面へ

カサレト教授は漁協の依頼で調査しまとめた民間機関の結果を分析。その上でサクラエビの成育時（10月～1月ごろ）に必要な植物性プランクトンに関連する物質など多様な側面からの調査が必要との見方を示した。調査項目には、サクラエビの餌となる植物性プランクトンの量を示す水中のクロロフィル（葉緑素）や、植物性プランクトンが増殖するために必要な栄養塩、光合成に関連する海中の光度などを挙げた。

同大の鈴木款（よしみ）特任教授（海洋生物地球化学）も「今回は海底の泥の汚染がないことが分かっただけ」と調査継続が不可欠とした。

漁協は2018年11～12月、工場放水路（水深10・9㍍）、富士川河口（同7・2㍍）、富士川の支流の早川（山梨県早川町）の3カ所で底の泥などを採取。民間の研究機関に分析を依頼した。漁協が発表した化学的酸素要求量（COD）や全窒素量、全リン量などは汚濁を示す値ではないことが分かった。

漁協の宮原淳一組合長は1日の記者会見で、県に追跡調査を依頼していると明らかにした。

（「サクラエビ異変」取材班）

さまざまな側面から調査が必要と指摘した静岡大のカサレト・ベアトリス・エステラ教授＝1日午後、静岡市駿河区の同大